

新型コロナウイルス感染症で影響を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。子どもの本にできることは限られていますが、だからこそ、その情報を求めている人たちに着実に伝えたいと思っております。

現在会員登録数 3,320 人さま。次号は 4 月 21 日発行の予定です／

十-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----十

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

【3】プレゼント

■-----■  
【1】お知らせ

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

● 当財団公式 Twitter → [https://twitter.com/IICLO\\_News](https://twitter.com/IICLO_News)

■-----■  
【2】コラム

\*\*\*\*\*

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Masayo's Talk

\*\*\*\*\*

『天邪鬼な皇子と唐の黒猫』 渡辺仙州/作 丹治陽子/装画 ポプラ社  
2020年1月 対象年齢：小学校高学年以上

あらすじ：平安時代。唐で捕獲されて船で日本に連れて来られ、天皇に献上された黒猫が語る人間（貴族）と猫の社会を描いた作品。天皇は猫を息子の定省（さだみ）に預け、定省はクロと名付ける。クロは定省にだけ、自分が人間の言葉を話せることを打ち明ける。また、クロは夢を見るが、それが前世に項羽であったときの夢だということがわかり、出会った猫の中に、前世で時間を共にしたものがいることも明らかになっていく。

Y：どこがおもしろかったですか。

M：定省の妻になる二人の女性の人物造型が興味深かったです。一人は文章博士の娘で、書を読みたいために定省の家に通ってくる義子。そして、天皇

の妻になって、息子に勅撰和歌集を編ませたいという野望を持っている藤原北家の娘、胤子（たねこ）。文学を愛する女性二人が友情関係を築いていく様子を楽しく読みました。二人がもっと作品内の事件に関わってもよかったなあと思うほどでした。

Y：私は、中国の歴史や古典の情報が作品のところどころに散りばめられていたところが楽しかったです。小中学校時代を北京で過ごし、今も中国・河南農業大学で日本語を教えているという著者ならではの作品だと思いました。

M：クロが右京の猫の親玉であるキトラと友だち関係を結んだり、左京の猫の親玉ハクタクに呼び出されたりする猫社会の様子は、『俺、つしま』（おぶのきょうだい/作 小学館）などの猫マンガを思い出しました。

Y：クロの視点で人間社会や猫社会が描かれているという意味では、『吾輩は猫である』の系譜にあるとも言えるかもしれません。

定省は、天皇になるまで、使用人が一人もいないような貧しい生活をしており、自分の食事も、猫のごはんも定省が作ります。

M：なかなか自立したイマドキの青年です。タイトルには、「天邪鬼な皇子」と書かれていますが、真面目すぎるくらいはあるものの、天邪鬼というイメージではありませんでした。ライトノベルっぽいタイトルにすることで、読者層を広げようとしたのかなと思いました。

Y：軽妙な会話で展開するストーリーからは、猫の口を借りて、自由であることの意義や、義を重んじることの大切さ、知性が生きぬく力をくれるということが描かれています。

M：TEENS' ENTERTAINMENT というシリーズ名がぴったりだと思った本でした。

\* 今回のゲストは愛知淑徳大学教授の酒井晶代（M）さんです。

\*\*\*\*\*

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

\*\*\*\*\*

第55回「さいかち淵」

誰かの声

書き出しは、「八月十三日／さいかち淵なら、ほんとうにおもしろい」。すぐに思い出すのは、「なめとこ山の熊のことならおもしろい」（「なめとこ山の熊」）。昔話が「むかしむかし…」などの決まった言い方からはじまるように、「……ならおもしろい」も、話を語り起こすことばなのかもしれません。

「ほんとうにおもしろい」といって、「ぼく」は、仲良しの「しゅっこ」（舜一）との夏の二日間を語ります。二日とも、さいかち淵に泳ぎに行くのです。さいかちの木が茂っているあたりが、川が深くなっている淵なのでしょう。八月十三日には、石神の庄助たち大人が発破をかけます。爆薬を川に投げ込んで、魚を気絶させて獲るのです。子どもたちも、小さな生洲をこしらえて、ひろった魚を入れました。ところが、川に入って、生洲をこわす大人がいたものだから、「しゅっこ」が「あんまり川を濁すなよ、いつでも先生、云うでないか。」と叫び、みんな、それにつづきます。

八月十四日は、「しゅっこ」が毒もみをします。川に毒を流して、魚をしびれさせるのですが、一ぴきも浮かんでできません。しかたなく、みんなで「鬼っこ」をします。何度もやっているうちに、にわかになんか変り、気がつく、空

いっばいの黒い雲です。雷が鳴り出して、いっぺんに夕立がやってきました。

くそのとき、あのねむの木の方かどこか、烈しい雨のなかから、  
「雨はざあざあ、ざっこざっこ、  
風はしゅうしゅう、しゅっこしゅっこ。」というように叫んだものがあった。しゅっこは、泳ぎながら、まるであわてて、何かに足をひっぱられるようにして逃げた。)

雨のなかから叫んだのは誰でしょう。「しゅっこ」がふるえながら、「いま叫んだのはおまえらだか。」とたずねますが、みんなや、ペ吉は、「そでない、そでない。」というのです。まるで「ざしき童子」のように(前回、当メルマガ NO.114 参照)、まぎれこんで来た誰かの声でしょうか。「けれどもぼくは、みんなが叫んだのだとおもう。」として話は終わりますが、ふるえる「しゅっこ」が川を見返した、その気味の悪さは消えないままで、私たちのなかに残るのです。  
(馬車別当)

(本文の引用は、角川文庫版『イーハトーボ農学校の春』によりました。)

\*\*\*\*\*  
《3》子どもの本の珠玉のことば 9  
\*\*\*\*\*

ひぐれの町の  
曲がり道  
何が出るのか  
曲がり道

(『まがればまがりみち』井上洋介/作 福音館書店 1999年9月、初出:「こどものとも」1990年12月)

初めて出会ったのは、雑誌「こどものとも」でした。表紙には、夜の風景に灰色の道、後ろ姿の男の子がいて、タイトルは「まがればまがりみち」。なんだか不気味な感じがするけれど、その落ち着かなさに惹かれて本を読みました。

夕方、一人で道を歩いている時、曲がった道の先から何が出てくるのだろうとドキドキする気持ちが共有できる本です。この本では、がまさん、やもり、まよい電車、大きな毛虫、大きなもぐらと続いて、少しずつ空想の世界に近づき、煙突に顔がついた6人の「えんとつ男」が出てきて、一気に空想の世界へと放り込まれます。そして、そのあとも曲がり道からは、いちばん星やブランコをこぐおじさんなどが出てきます。

先の見えない不安感と曲がったことによって出会う驚きは、毎日私たちが体験していることです。「まがれば まがりみち」と「まが」という音が繰り返されるタイトルも、まっすぐでないことを楽しみ、「まがまがしい」ものをも世の中の一部として受け入れることをよしするメッセージがこめられているようで、初めて出会って以来、ずっと惹かれ続け、曲がり道をくねくね歩き続けています。(Y)

\*\*\*\*\*

#### 《4》 行って来ました！

\*\*\*\*\*  
大阪府立中央図書館で2月22日から3月1日まで開催されていた資料展示「世界の子どもの本展－IBBY（国際児童図書評議会）がすすめる世界の児童書 国際アンデルセン賞とIBBYオナーリスト2018－」を見てきました。これは日本国際児童図書評議会（JBBY）が主催する巡回展示で、2018年の国際アンデルセン賞受賞作家の著書と、「IBBYオナーリスト」の61カ国、50言語、約200冊の本で構成されています。

国際アンデルセン賞のコーナーは作家賞の角野栄子さんと画家賞のイーゴリ・オレイニコフさんのパネル解説と本がありました。オレイニコフさんはアニメーション作家でもあるため、絵に動きが感じられます。よく知られた昔話を違った視点から解釈して描かれている点が興味深かったです。

IBBYオナーリストは、国際児童図書評議会の各国支部が推薦した作品のことで、「文学作品」「イラストレーション作品」「翻訳作品」に分かれています。クメール語やアルメニア語など、あまり見たことのない文字や言語の本もたくさんあります。「子どもの本を通して国際理解を深め、世界に平和を」というIBBYの理念にあるように、難民、戦争、平和など多様なテーマの本がたくさん選ばれていました。

その中で私が特に注目した本は、チュニジア共和国『大人たちの靴』（イネス・アバシー作 シルヴィア・ヴィヴァンコ絵）。パンフレットを読むと、大人たちの靴をはいてみた少女が自分の靴が最高だと気付くストーリーだということがわかりますが、絵を見るだけで物語が伝わってきました。

アルゼンチン共和国『母と死、旅立ち』（ニコラス・アリスぺ絵 アルベルト・ライセカ、アルベルト・チマル文）は、モノクロの線画で、表紙と裏表紙の両面から異なる話が始まり、真ん中の同じ絵で話が終わる構成になっています。表紙に死神の絵があり、怖いと思いつつも、死と正面から向き合う姿勢に惹かれました。

私は奈良県立図書情報館で2月に行われた同巡回展の関連企画であるロシア児童文学研究者の南平かおりさんの講演会に参加し、ロシア語圏の絵本については深く知ることができました。この展示は2021年まで日本全国を巡回するそうです。機会があれば、もう一度見てみたいと思いました。（K）

日本国際児童図書評議会（JBBY） 世界の子どもの本展  
<https://jbby.org/category/exhibition/sekai-hon-ten>

#### 【3】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『天邪鬼な皇子と唐の黒猫』を1名の方にプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ NO.115 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は4月10日(金)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

